



加茂
田上



五泉



匠の技が生む逸品



南魚沼



上越



- P2~3 五泉ニット工業協同組合(ニット製品・生地加工)
 - P4~5 ウエタックス(水中・防水音響機器)
 - P6 茂野タンス店(加茂桐筆筒)
 - P7 林宗平工房(塩沢紬)
 - P8 新潟県マップ
- 東北電力新潟支店の地域に寄り添う取り組み

新潟県では、その気候風土を生かした様々な工芸品が発展し、今なお脈々と受け継がれている。伝統的工芸品[※]に指定されている品目は16にのぼり、全国でもトップクラス。豊かな自然と文化の恵みを受け、長い年月をかけて培われた匠の技が根付いている。その技術は工芸品だけにとどまらず、現代の産業製品にしっかりと受け継がれている。本特集では、全国に誇れる新潟の匠の技を紹介したい。

※経済産業大臣の指定を受けた工芸品。主として日常生活で使われ、100年以上の歴史を有し、伝統的な技術・技法により製造されるなどの要件を満たした工芸品が指定される。

五泉市

ニット製品・生地加工

五泉ニット工業協同組合

高橋ニット

たかはしにと

／新潟染工

にいがたせんこう

ごせんとうぎょう
きんこうじょうへんみあ



五泉市

新潟県五泉市。その地は五つの泉という文字が表すように、古くから水がきれいな土地として知られる。豊かな水を活用し、江戸時代には絹織物産業が発達。戦後にニット産業が栄える下地をつくり、現在は日本一の生産高を誇るまでになった。

五泉ニットの品質の高

さを裏付ける代表格が縫製技術。細やかな編み目を正確につなぐ技術やニットと異素材を組み合わせる技術が、様々なファッションスタイルを実現する。きれいなシルエットだけでなく、着心地と着崩れしない丈夫さも持ち合わせるその品



五泉ニット工業協同組合理事長
高橋ニット代表取締役社長
たかはし まさふみ
高橋 雅文さん

質は、日本一の生産地にふさわしい。

昨今、安価な海外製品の流入などにより国内のニット産業を巡る環境は厳しい。五泉市も例外ではなく、出荷額は1990年の約800億円をピークに現在は115億円まで下降。49年に前身が発足し、同市ニット産業を牽引してきた五泉ニット工業協同組合に加盟する事業者数も最大時の約4分の1まで減少した。こうした状況下においても、ただ手をこまねているわけではない。同組合理事長で高橋ニットの社長の高橋雅文さんは、「現在、『五泉ニット地域ブランド化事業』を進めている」と強調する。「五泉といえばニット。ニットといえば日本の五泉」と国内外の幅広い層に認識されることを目指し、人材育成と地域活性化、販路市場開拓、広報・PRという4つの行動の方向性を打ち出した。具体的な活動として、地元商工会議所などと協力し、「五泉ニットフェス」というイベントを開催したほか



ロゴマーク通じ発信

3

匠の技が生む逸品



左/高橋ニットは着用時のシルエットを重視した商品の開発に力を入れている 中/完成品に対し、一着一着丁寧に手作業でアイロンがけを行い、その仕上がりを確認している 右/コンピューター制御の編み機によりニット生地が生み出される(以上、高橋ニット)



上/染色直後の生地。上手に染めるには熟練の技術が必要だ 中/加工作業の最終工程。はっ水効果や静電気防止の効果がある薬品を塗布している 下/新潟染工のはっ水加工技術が生かされた競泳水着。リオデジャネイロ五輪でも日本代表選手が使用した(以上、新潟染工)

高校生のニット工場見学、海外市場への進出準備などを行っている。

ブランド化事業の中でも特に注目すべき動きが五泉ニットのブランドロゴマークの制定だ。五泉の「五」をモチーフに編み地のパターンと糸が編まれる仕組みをシンプルにシンボル化。現在、五泉で作られたニット製品にはこのマークが施されており、高い品質を示す目印となっている。今後、ブランド化事業を進めるに当たり、大きな武器となることは間違いないとみられている。

五泉市には、糸を染める染工場や肌触りを良くし商品の風合いを出す加工工場も集まり、ニット産業を支えている。この地で製造から加工まで一貫して行えることが何よりの強みだ。

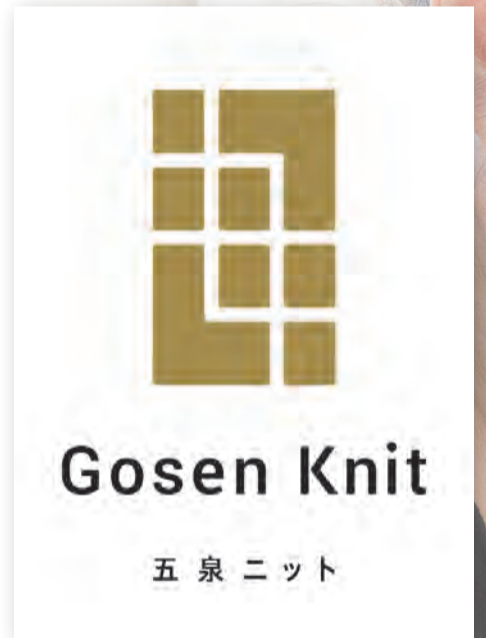
同組合の賛助会員で、織物・ニット生地の加工や染色、プリントを行う新潟染工。同社が生地に施すはっ水加工は競泳水着にとって欠かせないものとなっている。ロンドン、リオデジャネイロ両五輪では水泳日本代表選手の着用と同社の技術が生かされた。リオ五輪に至っては、代表選手のほぼ全員が同社が加工した水着を着用したそうだ。

同社社長の金塚紀之さんは、「大手メーカーと共同で開発を行ったが、求められる水準が高く非常に苦労した。生地の保水率をいかに基準内に収めるかなど試行錯誤の連続だった」と開発の苦労を語る。



新潟染工代表取締役社長 かねづかのりゆき 金塚 紀之さん

五泉ニットのブランドロゴマーク



同社は、はっ水加工に加え、繊細な中間色の表現や抗菌防臭加工、防汚加工など多くの付加価値を一枚の生地に与えている。同社の生地はワイシャツや小中学校指定のジャージなどに使われており、その技術は我々の生活の中に確かに息づく。世界に通用する確かな品質と技術力。ブランドロゴマークという新たな武器を得て、五泉のニットと加工技術は逆境をね返し、飛躍を遂げようとしている。

高い品質

ニットの裁断作業。型紙の通りに正確に生地をカットする(高橋ニット)

新潟染工株式会社

創 業：1984年
所 在 地：新潟県五泉市木越1600
ホームページ：http://www.niigatasenko.co.jp/



高橋ニット株式会社

創 業：1955年
所 在 地：新潟県五泉市泉町2-3-15
ホームページ：https://www.takahashiknit.co.jp/



上越市

水中・防水音響機器

ウエタックス

うえ たつ くす

水中・防水音響機器に使用する部品の寸法を測っている様子。防水性能を発揮するには寸分の狂いも許されない

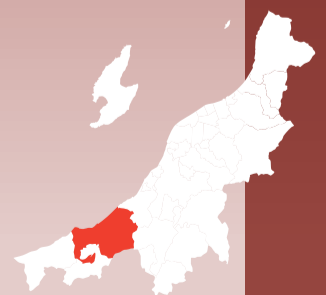
音響防水技術



ウエタックス代表取締役
うえ き まさたか
植木 正孝さん

五輪で毎回メダルが期待される、シンクロナイズドスイミング。競技を見ていて選手たちは水の中でどのように音を聞いているのか疑問に感じたことはないだろうか。実はプールの中に水中専用のスピーカーが設置されている。このスピーカーのおかげで、選手たちは一糸乱れぬ美しい演技を披露することができている。

新潟県上越市にはその水中スピーカーの国内シェア1位の企業、ウエタックスがある。同社の製品はシンクロの世界大会でも使用された実績があり、五輪日本代表チームの練習でも使われている。水中・防水技術に対する評価は世界的にも高く、音響防水分野で先端を行くメーカーだ。その技術を生かし、防水マイクや水中カメラ、防水スピーカーを搭載した災害用救助機器なども販売している。2016年には中小企業庁の「はばたく中小企業・小規模事業者300社」にも選定された。



上越市

創業は1986年。上越市に事業所を構えた理由を「私の出身地ということもあったが、何より音響防水技術を開発するに当たって非常に適した場所だったからだ」と同社代表取締役の植木正孝さんは説明する。水中スピーカーの性能検査には、深度が十分にある淡水と海水の環境が必要となる。上越市には海はもちろん近くにダムがあり検査に適した環境が整っていた。この環境が世界的な技術を生み、育てたといえるだろう。

同社の代表製品は水中スピーカー。耐水深10m、高出力かつクリアな音質、海水・淡水どちらでも利用可能な環境対応性を実現し、国内トップシェアを誇る。その用途は、シンクロはもちろん映画「ウォーターボーイズ」や「海猿」での活用、沖縄サミットでの水中警護など幅広い。防水マイクも主力製品のひとつだ。防水マ



全て手作業で生産を行っている



左／水中マイクのデモ機。水に浸しても機能に全く影響はない 中／防水機能と高音質を両立したインタビューマイク。台風取材などの際に多くのテレビ局で使用されている 右／実際に製造されている水中スピーカー



製品試験に使用している音響室。これ以外にもダムや海で試験を行っている



防水マイクの組み立て作業。50以上の部品を組み上げる



ウエタックス株式会社

創業：1986年
所在地：新潟県上越市岩木83-8
ホームページ：http://uetax.co.jp/hpj/

世界が評価する

イク特有のこもりがちな音質を改善。現在、台風取材など多くのテレビ局で使われている。

このほかにも、災害用救助機器「サーチライフ」の生産・販売も行っている。地震や水害によって倒壊した家屋など狭い場所に閉じ込められた被災者の捜索活動を悪天候下でも行うことを可能にした。東日本大震災でも実際に使用され、被災者

の救出に活躍した。

水中スピーカーを支える同社の音響防水技術は、植木さんが米国駐在時代に出会ったスキューバダイビングの水中通話装置の技術が源流となっている。帰国後、大学との共同研究などを通じてその技術をここまで育ててきた。植木さんは「たまたまこの技術に自分が目を付けただけ。やる気になれば誰にでもできる」と謙遜する。しかし、「国内オンリーワンの技術といえども、事業が軌道に乗るまで相当の時間がかかった。どのような立派な技術があっても、市場に出すにはその技術を身に付けるのと同じだけの努力が必要」と熱く語る姿からは、自社の技術への自信と愛情を感じずにはいられない。

「日本国内で設計開発・製品化・販売」を同社は会社理念に掲げる。上越の地で雇用の維持・創出に努めるとともに、ブランド力の向上に日々力を注ぐ。植木さんは「現場で作業し、製品の良し悪しを肌で分かるようになるなければならない。そこが分かって初めて技術開発に取り組みめるようになる」と断言する。新たな時代を開く技術革新は、このような姿勢を持つ企業から生まれる予感がする。

左／災害用救助機器「サーチライフ」を使用した訓練の様子
右／「サーチライフ」に搭載された防水マイクと水中カメラで被災者を捜索する



桐箆筒本体の裏板にかなながけを行っている様子。桐箆筒は基本的にオーダーメイド。つくり上げるまでに最低でも2カ月間は必要だ



大事なもの いつまでも美しく

加茂市・田上町

しげのたんすてん

茂野タンス店

加茂桐箆筒

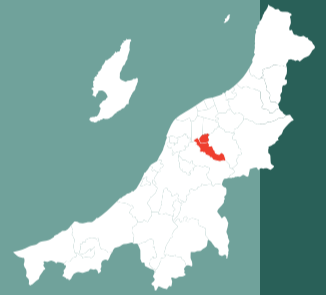


ショールーム内に展示されている伝統的な桐箆筒。優雅で美しく木の暖かみを感じさせる

軽くて持ち運び
とはもちろん、
で長持ちするこ
江戸時代、丈夫
火事が多い
といわれている。
在の東京)から
後期の江戸(現
起源は江戸時代
桐箆筒づくりの
れた実績を持つ。
は皇室に納入さ
茂野タンス店代表の
が「加茂桐箆筒」と呼ばれ、日本
つくりられる桐箆筒の約7割を占める。
「加茂市周辺の人は、おとなしくコ
ツコツと仕事をやり遂げる職人気質の人
が多い」と語るのは、茂野タンス店代表の
茂野克司さん。同店で行われた桐箆筒



茂野タンス店代表取締役
しげの たんす てん
茂野 克司さん



加茂市・田上町

かじつつ現代にマッチした新しいデ
術の結晶だ。
茂野タンス店は伝統的な手法を生
顧客の要望を聞き、それに応じて職人
が細やかな手作業を駆使し、丹精込め
てつくり上げる。まさに職人の心と技
術の結晶だ。
基本的には桐箆筒は、オーダーメイド。
顧客の要望を聞き、それに応じて職人
が細やかな手作業を駆使し、丹精込め
てつくり上げる。まさに職人の心と技
術の結晶だ。
茂野タンス店は伝統的な手法を生
かじつつ現代にマッチした新しいデ

嫁入り道具という言葉から思い浮かべ
るものは、桐箆筒という人も多いのでは
ないか。優雅で美しく木の暖かみを感じ
させる姿は、結婚という人生の晴れ舞台
にふさわしい。新潟県加茂市およびその
周辺地域で伝統工芸士によりつくられる
桐箆筒は「加茂桐箆筒」と呼ばれ、日本
つくりられる桐箆筒の約7割を占める。
「加茂市周辺の人は、おとなしくコ
ツコツと仕事をやり遂げる職人気質の人
が多い」と語るのは、茂野タンス店代表の
茂野克司さん。同店で行われた桐箆筒

しやすい桐は箆筒の
原料として最適だっ
た。その後、最初に
加茂で桐箆筒がつく
られ始めたのは約
220年前。加茂が
桐箆筒の産地として
栄えた理由は、天然
桐が豊富にあったこ
とや当時、船による
運送が盛んで加茂川
がその用を担ったこ
となどが挙げられる。
こうした環境が備
わっていたことと妥
協を許さない職人気
質とが融合し、日本
一の桐箆筒産地と
なった。1976年
には国の伝統的工芸
品にも指定された。
桐箆筒は難燃性や
断熱性に優れ、吸湿
性も高く内部の湿度
を一定に保ち湿気か
ら衣類を守る。また、
伸縮率が小さく伸び
縮みや割れが起きづ
らいため、ゆがまず
にいつまでも美しい姿を保つことが
できる。「加茂桐箆筒」は原木から完
成まで職人が一貫してつくっている
ことも特長のひとつだ。



左/伝統に縛られないモダンな桐箆筒も人気を集めている



中/用途に応じてかななを使い分ける



右/桐の板は薄くても1年、厚ければ3年もの期間干し続ける。天日に当て、雨風にさらすことで洗抜きし、桐箆筒に使えるものに仕上げる

有限会社茂野タンス店

創業：1926年
所在地：(工場)新潟県南蒲原郡田上町
原ヶ崎新田30-1
ホームページ・オンラインショップ：
<http://www.kamono.com/>



ザインの桐箆筒も生産して
いる。これらは欧米の見本
市に出展され、好評を博し
た。このほかにも、古箆筒
の修理・再生事業も行っ
ている。
桐箆筒業界は協同組合
に加盟する事業者が減り、
後継者が少ないという状況
に置かれている。しかし、
「現在は技を盗めではなく、
きちんと先輩が後輩に教え
ている。ものづくりをした
いという大学生も訪れてお
り、20代の職人もいる」と
茂野さんは話す。現状は厳
しいが、その技術は次世代
に確実に継承されている。
「着物を収納するものと
いう固定概念を取り払い、
『大事なものをしまっ箱』
という使い方を提案してい
きたい」と茂野さんは熱弁
する。絵画やカメラなど、
収納するのに適したものは
数多くあるそうだ。日本一
の生産地から桐箆筒の新た
な使用法が発信されようと
している。

南魚沼市

塩沢紬

林宗平工房

はやしつうへいこうぼう

林宗平工房
林正機さん

新潟県南魚沼市が位置する塩沢地方の織物の歴史は古い。約1200年以上前の奈良時代・天平年間に織られた麻布が正倉院に保存されている。

この「越後上布」と呼ばれる麻織物の技術を、絹織物に取り入れたものが「塩沢紬」。国内でも高く評価される紬の一つで、18世紀後半に誕生した。特長は、やわらかくて暖かみのあるふわっとした風合い。十字や亀甲で構成された紺と呼ばれる繊細な模様は、独特の上品さと落ち着きを醸し出す。1975年に国の伝統的工芸品に指定された。

「塩沢紬は『ぜいたくな普段着』と表現するのは林正機さん。塩沢紬を生産する林宗平工房の2代目だ。

工房の中には、職人たちが黙々と作業する音が響く。塩沢紬の生産数はごくわずか。ほぼ手作業でつくられており、様々な生産過程を職人たちが分業して受け持つ。まずは方眼紙に生地の上がりをデザインする図案づくり。塩沢紬はたて糸に生糸や節を持つ玉糸、よこ糸に繭を煮てほぐし、真綿にしてから手で糸を紡いだ

真綿手紡糸を主に使う。これらの糸を職人がつくり、それに別の職人が図案に基づき色を付ける紺づくりを実施。できた紺を無地の糸と組み合わせて織り上げる。こうした巧みな技術を経つつくられる塩沢紬の繊細な模様は見る人の目を魅了してやまない。

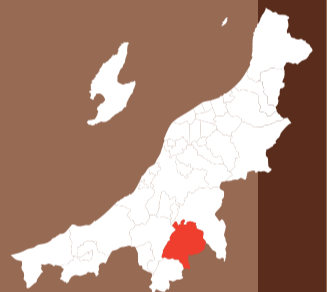
職人たちのほとんどは地元南魚沼市周辺の出身。冬場、農作業ができない期間の仕事として生まれたい織物の技術は現代もこの地に受け継がれる。「洋服が主流の現在、塩沢紬は趣



左/塩沢紬の織り上げ作業。湿度などにより日々状態が違い、それを踏まえた作業を行う必要があるためベテランでも1日50分程度しか織ることができない 中/頭の中にある色や模様を方眼紙に落とし込む。いわば塩沢紬の設計図だ 右/この工房で職人が糸づくりから織り上げまでの作業を一貫して行い塩沢紬を生み出している

味のもの。売れる量はどうしてもある程度決まってしまう。職人の高齢化などの問題も抱えており、販売拡大の妙案を見いだすのは難しい」と林さんの現状を見る目は厳しい。しかし、同業者でつくった協同組合で研究会を重ね、他の織物産地と合同で販売会を行ったりするなどの取り組みを行っている。まずはしっかりと良いものの生産を続けていく。そうすることが、塩沢紬の良さを広めるのに何より大切なこと」と、その目は未来を見据えている。

雪深い越後の地から生み出される塩沢紬。その糸の一本一本には、辛抱強くたくましい越後の人の思いが込められている。



南魚沼市



内閣総理大臣賞を受賞した「伝統的工芸品塩沢紬 訪問着『きりばめ細工古典文』」。塩沢紬の全ての技術、技法が込められた逸品だ



繭を煮てほぐし、真綿にしてから手で糸を紡いだ真綿手紡糸

越後の技と心 一織りに込め

林宗平工房

創業：1943年

所在地：新潟県南魚沼市六日町25-6



染料を使用し、紺づくりを行っている様子。場所を間違えれば製品に使うことはできないため、ミスが許されない緊張感ある作業だ

Made in NIIGATA 新潟県 マップ

~メード・イン・新潟~



佐渡エリア



加茂市・田上町 茂野タンス店
茂野タンス店のショールーム。端材を活用した小物の販売なども行っている

下越エリア



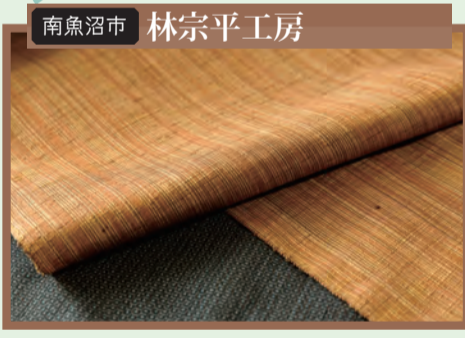
上越市 ウエタックス
ウエタックスはリオデジャネイロ五輪のシンクロ日本代表の練習などに協力。現地で水中スピーカーのメンテナンスを担当し、感謝状が贈られた

中越エリア



五泉市 高橋ニット
高橋ニットのショールーム。一般の人でも気軽に訪れ、買い物をすることが可能だ

上越エリア



南魚沼市 林宗平工房
林宗平工房でつくられた塩沢紬。繊細な縞模様は見ると魅了してやまない



五泉市 新潟染工
登山用の防寒着などにも新潟染工のはっ水加工技術が生かされている

東北電力 地域に寄り添う 取り組み

新潟支店

東北電力新潟支店では、「コーポレートスローガン」より、「そう、ちから。」の実現に向け、「地域を知る」取り組みに力を入れている。昨年12月から5回にわたり、新潟市の沼垂地区や白山地区をはじめとした支店周辺の「街歩き」を実施(①)。地元ボランティアガイドの案内のもと、史跡を巡り、新潟の地理や歴史、文化芸能などの知識・情報を得ることで、地域の方々の「コミュニケーション」に生かすとともに、県内外への情報発信を通じた地域活性化につなげることもがねらい。参加者は、「ガイドの方の地域に対する熱い思いに感銘を受けた。これまで歩んできた歴史に触れるこの地で働く自分ごとのように地域に寄り添うべきか、改めて考えてみたい」と語る。今後も地域をより知るために、新潟市歴史博物館「みなとびあ」において、勉強会を実施する予定。

また、上越営業所では「当社を知ってもらう」取り組みにも力を注いでいる。上越の地に電気が灯つて110年という節目に「ワクワク感謝祭」を開催し、高所作業車の搭乗体験や発電の仕組みを紹介する電気教室など、同社事業活動への理解促進を図っている(②)。

来場者からは、「東北電力の営業所に初めて来たが電気を安定的に供給するために大変な苦労をしていることを実感した。このような子供が喜ぶイベントを今後開催してほしい」との声が聞かれた。地域を知り、自らを知っていただくことで、地域の発展にしっかりと寄り添い、地域とともに成長していくことを目指している。



②上越営業所の「ワクワク感謝祭」において高所作業車への搭乗体験を行う地域の子供たち



①「地域を知る」ために、ボランティアガイドとともに重要文化財「新潟県議会旧議事堂」(白山地区)を見学する東北電力社員